

「保育内容（人間関係）」における自然体験活動と学生の成長・学び
田中卓也¹⁾・橋爪けい子²⁾

The earning for universities students study of contents and nature experience
activites(events) and lecture in early childhood care and education (humanities
and social science)

Takuya Tanaka, Keiko Hashizume

Abstract

The purpose of this study was to clarify the practical class report on the teaching method of child-care contents (humanities and social science) using an experiential learning in the training courses for early childhood educators for cultivation activities of sweet potato. The correspondence between contents of childcare and education of human relationships and social skills education was examined. The perspectives of social skills education based on childcare and education systems were discussed. These experience were learning for universities students were growing.

Keywords: contents of childhood and education of human relationships, social skills, agricultural experiences, nature experience activities,

**I. はじめに—本研究の目的と先行研究の
検討—**

本稿では、「保育内容（人間関係）」の講義を通じて、講義に用いた「さつまいもの収穫」がどのように学生の思考に活用され、「人間関係」の理解につなげていくのかというゼミおよび講義の実践の一例を考察・検討を試みるものである。

「保育内容（人間関係）」は保育内容5領域の一つであり、「人間関係」は名称にあるとおり、人と人との関わりに関する領域のことである。2017（平成29）年に出された「幼稚園教育要領」によれば「人間関係」のねらいは、①幼稚園生活を楽しみ、自分の力で行動する

ことの充実感を味わう、②身近な人と親しみ、関わりを深め、工夫したり、協力したりして一緒に活動する楽しさを味わい、愛情や信頼感を持つ、③社会生活における望ましい習慣や態度を身につけるである。これらのねらいが設定されているように「人間関係」は保育者や友達、地域の人々など多様な人々と関わる経験を通して、人と関わる力を養うとともに、子どもの自立を導くことが含まれている。これらの能力を考え、導いていく観点として、「非認知的能力」を育てるという観点が注目されている。

ところで、田中卓也・岩治まとか「保育者養成における講義のシラバス分析とその課題

1) 静岡産業大学経営学部
〒438-0043 静岡県磐田市大原1572-1

2) 浜松学院大学短期大学部
〒430-0906 静岡県浜松市中区住吉2-3-1

1) School of Management, Shizuoka Sangyo University
1572-1, Owara, Iwata-shi, Shizuoka

2) Hamamatsu Gakuin University Junior College
2-3-1, Sumiyoshi, Naka-ku, Hamamatsu-shi,
Shizuoka

に関する考察—保育内容（人間関係）を中心に—（『共栄大学教育学部研究紀要』第1号、2017年）では、保育者養成課程における広義のシラバスを分析する中で、多くの大学・短期大学では、自己の確立と他者の共感的理解・コミュニケーションの大切さを学び、「人と関わる力を養う」という保育者の役割を認識することを目的としていることを明らかにしている。

一方で現在の学生の傾向として、自己の確立に悩んでいたりと、コミュニケーション能力が不足していたりという傾向があると言われている。また本田由紀『軋む社会—教育・仕事・若者の現在—』（河出文庫、2009年）では、実際多くの大学ではそれらを補うために、キャリア教育を中心として自己の確立や自己分析、コミュニケーション能力の向上といった目的の科目や講座を開講している。さらに同『教育の職業的意義—若者、学校、社会をつなぐ—』（ちくま新書、2009年）では大学生に限らないが、若者の進路意識に対して、「やりたいことがわからない」という不安、あるいは、やりたいことがあっても「それが実現できるかどうかかわからない」不安を助長した一面があることも指摘されている。保育者養成課程に所属する学生は保育者を目指すという点で、一般的な大学生よりは職業意識や進路意識が高いと考えられるが、やはり自己の確立や自己分析といった面の指導は必要であり、「非認知的能力」を育む保育という点を考えたうえで、「人と関わる力」の基礎としての自己理解を深めることは大切な指導領域であると執筆者は考える。さつまいもの栽培および収穫を通して、学生の自己理解を促進し、幼児の人間関係の理解と「人と関わる力」の理解につなげることを目的としている。

筆者は「保育内容（人間関係）」の講義を、現在の勤務先で担当している。前任校では別の教員が担当したため、筆者はゼミにおいて、人間関係と遊びに関わる分野を中心に講義を行っていた。遊びの中では様々な人間関係やそれぞれの子どもたちの情動の制御や調整が行われているが、感情は目に見えないため、複雑な人間関係のつながりを見落とすことも

ある。そこで、筆者の担当講義では、自己の人間関係のしくみを理解することから始めることにした。

ゼミの講義内容は、主に「人と関わる力」、「気になる子どもへの対応」、「子どもと保育者の信頼関係の構築」、「協同性づくり」、「道徳性の芽生え」といった内容について遊び場面とのつながりを提示しながら、そこでの人間関係の様子を含めた理解や検討である。また最後に事例検討という形で講義を行い、学生同士でのグループディスカッションを試みた。

II. 保育者・教員志望学生の自然体験

しかし、子どもの自然との関わりを援助するためには、まず保育者自身が、動植物の飼育・栽培の経験など自然体験を十分に持っていなければ、それらを有効に実施することはむずかしい。細田成子・山根一晃・田川悦子・西島大祐「野外教育施設（東山ビオトープ）を活用した保育者養成に関する研究（1）」（『鎌倉女子大学学術研究所報』第8号、2008年）では、保育職を目指す短期大学生の自然環境に関する意識調査を行った結果、自然環境に触れたり、そこでの遊びを経験している学生は「多いとはいえない」ことを見出し、教育内容として自然物を身近に感じやすい植物栽培を取り入れ、「育てる」経験をさせる必要性を喚起している。

また井上美智子「自然との関りの観点からみた現職保育者研修の実施実態」（『大阪大谷大学教育福祉学部紀要』第34巻、2008年）のなかで、若者の自然体験不足や理科離れが高等教育機関にも及んでおり、若い保育者や保育者を志望する学生に生活体験や自然体験が不十分なために「保育者を志望する学生の実態と自然とのかかわりを援助できる保育者像には隔たりがあると考えられ、保育者養成にはその間隙を埋める教育が従来よりも求められている」と指摘している。この井上の調査によれば、保育者養成の短期大学149校のうち「自然」に関する内容は「領域環境」を中心にほとんどの養成校の教育において行われていたが、実体験を導入していたのは6割程度であったといわれる。学生の体験不足を補

うためには講義ではなく「体験的な授業」が必要だとし、飼育栽培実習や植物遊び体験、野外の動植物の観察、五感を使った身近な自然体験等の導入を提案している。

以上のことから、保育内容「環境」において子どもの自然との関わりをよりよく促すには、まず保育者自身が自然体験を豊富に持つことが重要であり、そのためには保育者をめざす学生の養成課程において、学生が自然体験を積むことのできる授業を導入する必要があるといえる。

執筆者は昨年まで、S県内の四年制大学で保育者養成課程（幼稚園教諭）を担当しており、専門演習（ゼミ）を担当するなかで、学生が自然体験の機会を多く持つよう、周辺の自然観察や採集とともに野菜栽培を授業に取り入れていた。

Ⅲ.筆者Tゼミにおけるさつまいも栽培

筆者のゼミでは、2015（平成27）年の前期に「専門演習」の一部として実施した。受講者はK大学教育学部教育学科の3年生～4年生の男子・女子学生25名（2016年度は24名、2017年度は22名）である。畑の持ち主の方より、「栽培・収穫スケジュール」の説明書を事前にいただき、手順や方法などを学ぶことになった。（説明書は2015年用）なお、説明書は以下のようになっていた。

Tゼミのみなさん

みなさん一緒に、「さつまいも」を育てましょう！おいしく食べましょう！

【ねらい】

- ・さつまいもの栽培方法をおぼえ、さつまいもの収穫の喜びを知る
- ・栽培を通して、自然の恩恵に深く感謝するとともに、食物を大切にすることを育む

【対象人数】

- ・25名（4年生10名、3年生15名）

【場所】

- ・O家畑（S県M郡M町）

【栽培期間】

- ・5月～10月

【準備するもの】

- ・材料：苗（紅赤、農林1号、紅農林 長さが25cmくらいの太いものを使用）
- ・機材：農作業用機材（鍬、スコップ）
- ・肥料：堆肥、草木灰、化成肥料

【実施方法と手順】

- ① 苗を植える前（1週間前）にうねをつくっておく
- ② 学生さんを集合させ、5人1組にグループを分ける
- ③ うねの中央に苗を斜めになるように差し込む
- ④ 茎の葉の色が淡ければ、少量の化成肥料を溝に入れる。
- ⑤ さつまいもの収穫までにはおよそ、2回から3回は肥料を追肥し、除草もかねて、軽く根本に土を寄せる
- ⑥ 植え付けから4か月以上たったら、晴れの日を選んで収穫作業を行う
- ⑦ 茎は刈り取って、畑の外に捨てるか次回のための肥料にする
- ⑧ 貯蔵はなるべく湿気の少ないところにしまっておく。できるだけ傷がないさつまいもを選ぶ

この説明書がゼミ学生らに配布され、学生らは説明を聞きながら、「見よう見まね」で作業に取り組んだ。「うねって何？」「植え付けてどういう作業？」という疑問に感じた学生は、その場で担当者に質問し、わからなかったことについて習得した。お盆以外の夏季休業中においても、Tゼミの有志学生らで、水巻や雑草取りなどを分担しながら欠かさず行うようにしていた。

同ゼミにおいて畑を用いた野菜栽培は本年度で4年目である（2018年度は実施せず）。もともとはK大学の敷地内の土壌を改良することも企画されていたが、諸事情により実現することは叶わなかった。現敷地の畑において一年を通じて、さつまいもを栽培している。

約四方およそ50m畑を2面を使用している。4月の4回目のゼミで、さつまいもの種の植え付けをゼミ学生全員で行い、5月の最終週にきゅうり、ミニトマト、なすの苗、6月末にさつまいもの苗の植え付けのお手伝いを行った。約5名ずつのグループを編成し、授業時の作業および授業外の日常の世話をグループで協力して行うようにした。

それとは別に7月末からきゅうり、ミニトマト、なすの収穫が始まり、ゼミ学生の有志の者で7月末の授業終了まで継続して行った。10月中旬にはさつまいもの一斉収穫を行い、ゼミ内のみんなで、畑の持ち主の方らとともに試食した。

おもに2013(平成25)年～2014(平成26)年度における筆者のゼミのレポート課題として、「野菜栽培の記録(各自)および野菜栽培に関するレポート」を提出するようにした。その他ゼミでは、大学内を探索する「秋探し」や「秋の草花観察とスケッチ」についても実施させた。

IV. さつまいもの収穫について

毎年10月(中旬)ごろになると、畑の持ち主であるOさんより連絡が入り、執筆者Tゼミ学生全員でOさんの畑に出向き収穫作業をおこなう。Oさんにご挨拶を済ませた後、持ち主の方の指示に従い収穫することになる。

収穫の経験のない学生もいる。彼らは収穫経験のある学生をまねながら、作業を行った。長く伸びた蔓を力強く引っ張り、それを辿ることによって立派に育ったさつまいもが登場することで、学生は喜びながら収穫する学生の姿はなかなか貴重であった。2015(平成27)年はあいにく天候不順であったこともあり、大豊作とは至らなかったが、「ねらい」にもあったように、収穫の喜びをそれぞれに感じていた。

さつまいもが余った場合には、学生らがおみやげとして2～3個ずつ自宅に持って帰ったり、Tゼミがゼミ活動で関わっている「SCM(総合型スポーツクラブM)」の会員の方にも無料で進呈している。かつては会員同士で「さつまいもパーティー」をすることもあった。

V. ゼミ学生へのアンケートと感想

本作業開始前に、ゼミ学生を対象に「アンケート」(A4用紙表裏1枚)を実施した。アンケート項目の内容は以下のとおりである。

- (1) あなたは「さつまいも栽培」の体験はありますか？
 - A) 前に体験したことがある。
 - B) 初めて体験した
 - C) 体験したことがない
 - D) どちらともいえない
- (2) 「さつまいも栽培」の体験は、どこの場所で行われましたか？
 - A) 幼稚園・保育園
 - B) 小学校
 - C) 中学校
 - D) 高校
 - E) 大学
 - F) 自宅
 - G) 外出先
 - H) どちらともいえない
- (3) さつまいもの栄養について、知っていることを書きなさい。(自由記述)
- (4) さつまいもで料理をするなら、どのようなものにしますか。(自由記述)
- (5) 焼き芋の手順、方法を知っていますか。(知っている・知っていない)
- (6) さつまいも栽培における自己課題を書きなさい。
- (7) さつまいも栽培を通しての感想について書きなさい。(以上)

さつまいも栽培の体験の有無を聞いたところ、「前に体験したことがある」が14名(56%)であり、「初めて体験した」と回答した学生が10名(40%)であった。「どちらともいえない(はっきりとした)記憶がない」と回答したのも1名(4%)存在した。さつまいも栽培体験のある学生が多かったことを示す。また体験した場所について聞いてみると、「小学校」が8名(32%)であり、「自宅」が2名(8%)であった。また幼稚園・保育園と回答した者は15名(60%)と多いことがわかった。

アンケートとは別に、筆者からゼミ学生ら

に現在の「人間関係」の感想について聞いてみた。そこで一番多く挙げられたのは「友達の量が多い」ということであった。幼児期は主に家族や近所、幼稚園（保育園）での人間関係であったが、大学生である現在は「人間関係の幅が広い」という特徴があり、幼稚園から小学校、中学校、高校、大学までの人間関係をはじめとして、習い事、バイト先、部活・サークル、趣味仲間、恋人など、その人その人それぞれに多種多様な人間関係が広がっているようである。しかしながら幅広い関係が広がる一方で、それぞれについては「浅いつながりが多い」という感想も少なくなく、家族であっても、進学のための一人暮らし等によって関わりが少なくなっている等の意見も多く出た。また「友達の友達がいる」と言う視点やアルバイト先などの「上下関係がある」という感想も見られた。

また「さつまいもの栽培」を通して、彼等に感想を聞くと、「なかなか話すことのできたメンバーとも気軽に話げできた」とか「さつまいもの話で盛り上がり、いつのまにか仲良くなっていた」、「しばらく疎遠であった先生とも無事話げできたし、Oさんとも気軽に接することができた。さつまいものことがあんなに語れるってある意味、すごい」といった人間関係についての感想も見られた。

VI.H大学短期大学部におけるさつまいも収穫作業について

また筆者Hの本務校においても、さつまいも栽培を実施している。Hは「環境指導演」の講義内で毎年「いもほり」を受講学生に実施させている。「いもほり」計画書を以下に示す。

H〇年〇月〇日

H.

いもほり計画書

目的：幼児教育学科2年生を対象に「環境」（園外環境にかかわる活動について）授業の一環としていもほりを体験し、園外保育を実施する上での配慮点等を学ばせる

1 学生のねらい

- (1) いも掘りを体験し、いもの生育している様子や土の感触を知り、幼児への指導演を具体的に考える場である。
- (2) 目的地までの移動手段や危機管理を考えたり、いも掘りの手順を進める中でどう感動し、どう共感して保育効果を挙げたりするのかを具体的に学ぶ。収穫の喜びや食する方法を各自で研修する。

2. 実施日時 平成〇年〇月〇日（日）

9:30～10:30 ABCクラス(59名)

10:40～12:10 DEFクラス(63名)

※当日雨天の場合 〇月〇日に延期

3. 目的地 H所有の畑（約290.4㎡）

I市S地域

J R I 駅南口からバス乗車し、「〇〇〇〇」で下車(5分)

4. 日程 現地集合9:00

- ①いもの育っている様子を見る
- ②掘り方を聞く
- ③掘る（一人二株、掘りたいものは持ち帰り、量の多少は調整し合う）
- ④写真を撮る（自由）
- ⑤片づけ（手洗い）＝タンク等に用意した水を使用
- ⑥終了挨拶
- ⑦出席簿に記名後に解散
現地解散【I駅行バス】最新情報は個々に確認すること

5. 方法

- ①学校から現地までの移動も学習時間とし、1講義分を充てる（自宅から直接も可）
- ②教員の参加＝Hは現地で受け入れ準備対応
- ③収穫したいいもは、後述（10課題 レポート提出②）に個人で活用すること。また後日講義授業中に「ホットプレートやきいも」の体験に活用する予定。

6. 経費 交通費は各自負担。いもは無償。

7. 服装 よごれてもよい服装（スカートやヒールの靴は不可、スニーカーも泥になることを想定

8. 持ち物

- ・スーパーのビニール袋（記名したもの）
- ・厚手の袋（いも入りビニール袋を入れる）
- ・おしぼりタオル
- ・弁当の持参は自由（畑の近くにお宮がある）
- ・電車賃（H⇄I 460円）
- ・バス賃（I⇄S 320円）

9. 注意事項

- ・Hの自宅からは1kmほど北に離れており、全くの農地の為、水道、トイレ等はありません。【トイレ】はバス停南の「D」に依頼しました。極力駅施設を利用。

10. 課題 レポート提出

- ①実施計画と報告書
- ②収穫したいもの実践活用法を2つ以上記入

11. その他

服装や地域の人への挨拶などに配慮。事後の内容に参加してください。

「いもほり」はHの担当する「環境指導法」の学外授業の一環で行われている。H宅にある広大な畑を利用し、受講学生全員で収穫作業にあたらせている。担当者のきめこまやかな注意事項などが目を引く。前述のいも栽培・収穫作業とは異なり、大規模であり、講義の単位に関係するものであり、学生らも緊張感のなかにも、楽しみを目的としながら参加した。

VII. 学生の感想

参加した学生らは、どのような感想を持ったのであろうか。作業に関わった学生らがこの経験を通じて、とりわけ「人間関係」について彼らが学んだことに限定し、抽出した。なお提出された感想は全140名分である。ここで10名の感想を紹介したい。

①「これから私が保育者となり、いも掘りの進め方を教えていくので、保育者が援助する大切さ、方法を考えることができた。自

分で掘りたいものを食するのはうれしくて、いつも以上においしく感じられた」

②「幼稚園の時にいもほり遠足へいったことを思い出した。次は子どもたちに指導する側なので、よい体験ができるように考えていきたい」

③「子供や保護者へのお便りはどうすればいいのか。学びました。いもの掘り方、活用をとして、普段できないことを経験させることの重要性を知ることができました」

④「目的地に行くまでは交通機関や歩いて移動することがあるので、下見をしてから行かないとどんなところに危険性があるかわからないので、危ないと思う」

⑤「いも掘り」など園外に出る保育では、子どもたちの気持ちが高まり、普段起きない問題も起きてしまうように思います。その楽しさうれしさを保育者は受け止めつつ援助しなければならぬと改めて思いました」

⑥H先生の畑に行くまでが楽しかったです。友達とバスや電車に乗って遠足に行くみたいにワクワクしました。いもを掘って大きなものが出てくると、子どものように喜んでる自分がいました。

⑦『いも掘り』は家の家庭菜園で何度かしたことがあります。でも、友達と一緒に掘ることによっていっしょに喜んだりすることもできました。また自分で掘りたいものを食べて、保護者とも喜びを分かち合えると思いました」

⑧「いも掘りの時は子どもの様座穴気持ちや反応に共感してあげたいと思う」

⑨『いも掘り』一つとっても、計画から収穫後まで、様々なことに配慮が必要であることが分かった。子どもへ指導するためには、ま自分が行ってみることで、どのような配

慮、援助、声掛けが必要であるかや、どのような（ねらい）を立てるべきかを考えることが求められるのだと思った」

- ⑩「実習以来のいも掘りでした。先生の沢山の準備をしてくださったおかげで、皆がスムーズに掘ることができました。子どもたちがよりよい環境で行うには保育者の徹底した配慮が必要だと思いました。もちろん、安全面への配慮をするとともに保護者への報告をすることも必要だと感じます」

幼児教育学科140名分の感想のうち、すでに保育者に進路を決定している10名の感想をピックアップした。さまざまな感想のなかでも、「友達と一緒に掘ることで一緒に喜んだりすることができる」をはじめ、「保育者としての援助」、「保育者の配慮、援助、声掛けが必要」、「下見をしてから行かないとどんどころか危険性があるかわからない」、「保護者へのおたよりをどうすればよいか学んだ」など学生が述べているように、保育内容（環境）ならではの感想ばかりではなく、保育内容（人間関係）の内容も散見されることが彼らの感想からうかがえる。「幼稚園教育要領」の「人間関係」の「内容」に示されている「（2）友達と積極的にかかわりながら、喜びや悲しみを共感しあう」、「（8）友達と楽しく活動する中で、共通の目的を見出し、工夫したり、協力したりなどする」、「（10）友達とのかかわりを深め、思いやりをもつ」と関連していることがうかがえる。

「内容の取り扱い」にもあるように、「（1）教師との信頼関係に支えられて自分自身の生活を確立していくことが人とかわる基盤となることを考慮し、幼児が自ら周囲に働きかけることにより多様な感情を体験し、試行錯誤しながら自分の力で行うことの充実感を味わうことができるよう、幼児の行動を見守りながら適切な援助を行うようにすること」と示されており、さつまいもの収穫作業を通じて、学生らが土の感触をそれぞれがイメージしたり、友達と共感したりして、作業を行いながら、いもを掘り起こした時の喜びを互い

にわからあったり、学生自らが保育者になった際を見据えて適切な援助について考えるということにつながっているようにも感じさせる。

いもの収穫作業は、人間関係を円滑にし、よりよい関係性を築くことにも影響を及ぼしていることがうかがえる。

Ⅷ.授業体験前と授業体験後のさつまいも栽培および収穫・自然体験への意識の変化

さつまいも栽培・収穫作業において、学生らは「五感」を通じて自然の生命力や脅威や不思議さ、農作業の苦労と達成感や協働の喜び、さらには人間が自然に関わることの意味を理解する様子が感じとれる。

すなわちさつまいも栽培・収穫を用いた体験授業は学生の栽培や自然体験への親和性を高めるだけではなく、ひいては保育者としての資質を高める効果があることが示されたものと考えることができよう。今後の課題としては、自然体験授業の内容の充実および、保育者としての保育実践にどう活用するかを検討を深めていくこと等があげられる。

Ⅸ.おわりに

保育内容「環境」のみならず、「人間関係」においても、子どもの自然との関わりをよりよく促すことが大切であり、まず保育者自身が自然体験を豊富に持つことが重要であることがわかった。そのためには保育者をめざす学生の養成課程において、学生が自然体験を積むことのできる授業を導入する必要があるといえる。さらに「人間関係」の講義の視点からも自然体験活動は重要視されるべきであり、各養成校において積極的に取り扱う必要があると考える。

【引用文献・参考文献】

- 1) 文部科学省『幼稚園教育要領解説』フレーベル館、2017年。
- 2) 厚生労働省『保育所保育指針解説』フレーベル館、2017年。
- 3) 井上美智子「自然との関りの観点からみた現職保育者研修の実施実態」（『大阪大谷

- 大学教育福祉学部紀要』第34巻、2008年、1～7ページ)。
- 4) 細田成子・山根一晃・田川悦子・西島大祐「野外教育施設(東山ビオトープ)を活用した保育者養成に関する研究(1)」(『鎌倉女子大学学術研究所報』第8号、2008年、87～89ページ)。
- 5) 井上美智子「幼児期の環境教育研究をめぐる背景と課題」(日本環境教育学会編『環境教育』2009年、1～4ページ)。
- 6) 本田由紀『軋む社会—教育・仕事・若者の現在—』(河出文庫、2009年、1～5ページ)。
- 7) 本田由紀『教育の職業的意義—若者、学校、社会をつなぐ—』(ちくま新書、2009年、1～8ページ)。
- 8) 無藤隆「保育実践と保育環境」(総説)『保育学研究』第50巻第3号、(2012年、238～241ページ)。
- 9) 芝田史仁「保育者養成課程における地検型学習を取り入れた保育内容(環境)の指導法授業実践報告: サツマイモの栽培について」(www.shinai-u.ac.jp)
- 10) 岡野聡子「体験活動と授業後の発展学習を重視した保育内容『環境』の授業展開: 大学2年生前期授業における実践事例から」『環太平洋大学研究紀要』第7号(2013年、29～32ページ)。
- 11) 氏原陽子「授業『保育内容(環境)』に関する一考察」『名古屋女子大学紀要』(家政・自然編・人文社会編)第60巻、2014年、201～203ページ。
- 12) 斎藤健司「保育内容『環境』の教材研究—学生の農業体験を通して(2006年～2015年)—」(『新見公立大学紀要』第37巻<研究ノート>、2016年、41～45ページ)。
- 13) 山路千華「保育内容指導法『環境』の授業における実践的取り組み」『白鷗大学教育学部論集』(第10巻第2号、2016年、480～484ページ)。
- 14) 毛利泰綱「保育内容(人間関係)の教育方法の一考察」
(respository.fukujo.ac.jp/)
- 15) 伊藤理絵「保育内容 人間関係」再考:
- 非認知能力を育む保育の観点から」『名古屋女子大学紀要』(家政・自然編、人文・社会編)2017年、286、295ページ。